



## 6 幼稚園（保育所）における環境学習プログラムの作り方とその展開

社団法人愛知県私立幼稚園連盟 牧原東吾

|        |                                                                          |
|--------|--------------------------------------------------------------------------|
| プログラム名 | 園外保育を通して豊かに自然と触れ合う                                                       |
| 参加対象   | 幼稚園（保育所）園児                                                               |
| 実施時間   | 月1～2回を年間実施                                                               |
| 実施場所   | 幼稚園の身近な場所のなかで最も自然が豊かで、年間を通して園児と出かけることのできる定まった場所                          |
| ねらい    | 幼児にとって魅力的な遊びとしてとらえられた自然体験を、年間を通して積み重ねることで環境に対する基本的な感性を育む。                |
| 内容     | 1 フィールドマップを作る。<br>2 フィールドマップをもとに四季それぞれのねらいを定め、どんな経験や活動をするのか具体的に計画し、実施する。 |

### 1 幼児期の環境教育のあり方

#### (1) 幼児期の育ち

幼児は旺盛な好奇心に基づいて自分の身のまわりの物や人に興味や関心をもち、遊びを中心とした生活の中で、その対象に自ら働きかけることによって育っていきます。ですから、幼児期は幼児の生活や遊びを離れて、知識や技能を一方的に教えられて身につけていく時期ではなく、生活や遊びの中で自分の興味や関心に基づいた直接的・具体的な体験を通して人間形成の基礎となる心情や意欲や態度が培われる時期であるといわれています。すなわち、この時期の教育においては、幼児が周囲に存在するあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境にかかわることによって様々な活動を展開し、充実感を味わうという体験が重視されなければならないのです。

こうした幼児教育の基本に立って考えれば、幼児期にどのような体験を積んだかが、その人が将来にわたってどう生きていくかという人格の形成に深くかかわるものとなります。

#### (2) 幼稚園（保育所）の環境教育

もともと幼稚園（保育所）教育には「教科」という考え方はなく、その教育は生活や遊びの中で総合的になされていくものです。上のような幼児期の育ちから考えても、幼児教育における環境学習は豊かな自然との共生的な体験を通して展開されていくべきもので、この幼児期の原体験が生涯を通しての環境学習の前提をなすものになるだろうと思われます。

しかし残念なことに、高度成長経済の中で自然との関係性が希薄になった大人たちの暮らしぶりを反映して、今の幼児を取り巻く状況は自然との共生感を十分には感じられないものとなってしまっています。

そこで幼稚園（保育所）においては、園生活の随所に幼児が心をときめかせ、目を輝かせてかかわることのできる自然環境を豊かに構成していかなければなりません。ただ、この場合留意しなければならないのは、単に自然の中に出かければいい、

持ち込めばいいということではありません。自然環境を豊かに構成していくことは、その自然は園生活の中で幼児の主体性に基づいた自由な遊びとして位置づけられていく必要があります。園内にビオトープを作ったが、それが壊れることを恐れて立ち入り禁止にし、子どもは遠巻きに指をくわえているだけ、というような愚は間違っても犯してはなりません。

目で見、耳で聞き、肌で触れ、鼻で嗅ぎ、口にして味わい、幼児が五感のすべてを使って自然に働きかけ、働き返される。こうした応答的な試行錯誤を繰り返すことによって自然と自分との同一感を覚え、知識や理論以前の環境に対する感性を育成することができるかどうか、幼稚園（保育所）教育における環境教育の最も重要な課題であるといえるでしょう。

## 2 生活や遊びの中で幼児に自然を感じさせるプログラムの基本

つぎに幼稚園（保育所）において、幼児の発達の特性に基づいた環境学習プログラムの基本的なあり方について考えていきます。

### (1) 幼児に五感を使った直接体験を

幼児が豊かに五感を使って自然に対する試行錯誤的な直接体験ができるようにしましょう。生活や遊びの中で実際に体験してみて、“あっ、そうか！”と心と体でわかり、その体験が心の奥深い所にしまいこまれていくことが大切です。

### (2) 幼児に未知との出会いを

幼児が初めて出会う未知なるものや事象のすべてに好奇心を抱き、遊びとしてかわっていけるようにしましょう。自然との出会いによって呼び覚まされた感動、驚嘆、畏敬、不思議、神秘、賛嘆、そしてときには恐怖さえもが幼児の自然に対する興味や関心をかきたてていきます。

### (3) 幼児に生命との触れ合いを

幼児の生きものに対する興味や関心を大切に、実際にかかわることができるようにしましょう。身近な動物を観察、捕獲したり、植物を観察、採取したりする機会をつくり、飼育したり、遊んだり、食べたりする保育活動に発展させることで、幼児に人間と生きもの、生きもの同士が自然の中でのつながり合っていることを感じさせましょう。

### (4) 幼児に豊かな季節感を

生まれて数年の幼児にとっては、季節の変化を体験するということ自体が新たな経験です。まずは、今の季節をひとつ前の季節からの変化としてとらえさせることから始め、やがて、1年という単位の自然の変化を感じさせていきます。四季の自然の移り変わりは幼児の遊びに多様な変化をもたらし、そのことが、人間もまた季節という自然の時間軸の中にいることを感じていくことになります。

### (5) 年間を通して同じフィールドに

ひとつの地域の中でバランスをもってつながり、四季それぞれの表情を見せる自然と触れ合っこそ、幼児は自然を自分の身近な存在として感じていくことができます。

### (6) 保育者は幼児の将来の環境学習を見据えて

幼児のための環境学習プログラムとは言っても、未分化な発達段階にいる幼児自身には学習をしているという意識が無いのは当然のことであり、幼児は園生活の一

部として、あるいは魅力的な遊びのひとつとして活動しているわけです。しかし、保育者はそのプログラムに基づく活動の一つ一つについて、それが将来の環境学習に連続していく種子としての質を内包しているということを認識し、見据えてかわっていかねばなりません。

### 3 園外保育による環境学習プログラムを作る

ここでは身近な園周辺の自然公園や里山へ出かける園外保育を例にとって、幼稚園（保育所）の環境学習プログラムの作り方を考えていきます。多くの園で行われている園外保育を、2で述べた基本となる項目を取り込みながら、幼児が豊かに自然と触れ合う環境学習の大切な“かなめ”にしていきたいものです。

(1) 幼児と年間を通して出かける場所の概念と情報をフィールドマップにしてみよう。

年少から年中、年長と連続する3年間を通して同じ場所を幼児とともに巡っていくことが大切です。そうすることによって、四季それぞれの表情を見せる自然を幼児が感じられるようになり、命の循環を知ることができるようになります。そのためには、出かけようとする地域の様子やどんな生きものがいるのか、あらかじめ調べてフィールドマップにしてその概念と情報を確認しておきます。そして、実際に1年活動したら情報を更新して、次の年度につながっていくようにしましょう。

#### フィールドマップの各エリアの様子と生きもの



#### Aエリア

休耕田を中心に沢が流れる。多種の山野草、真竹、山菜。カエル、ホタル、水生昆虫。

#### Bエリア

寺院には孟宗竹林、杉、槇などの巨木。栗の元養殖林。駐車場もある。

#### Cエリア

里山の麓。水田に注ぐ小沢沿いの道は、クヌギなどの雑木林に囲まれた山奥の沼地に続く。耕作をやめた荒れた元畑。甲虫類、サワガニ、カエル、水生昆虫、マムシ。山野草。

#### Dエリア

里山の山中。森林組合によって管理されている杉、檜林。下刈

りされて見通しがよく、山道も整備されている。

#### Eエリア

山域全体の調整池と造成された後放置された草地。池には魚類が多く市民釣り場に指定され、駐車場もある。帰化植物の多い草地にはバッタなどの昆虫が多い。

#### Fエリア

里山の頂上一帯。一帯が見渡せる展望台と広場がある。神社の鎮守の森は大量のスダジイのドングリを降らせる。



- (2) 作ったフィールドマップをもとに四季それぞれの“ねらい”を定め、どんな経験や活動をするのか具体的に計画してみよう。

1年間を四季ごとに分けて、それぞれに幼児に育てたい“ねらい”と、経験させたい活動をフィールドマップの情報を参考にしながらまとめていきます。ここでは春のプログラムを例にして考えていきます。

#### ① 春のねらいと経験

「ねらい」 “春 めばえるいのち”

幼児に長い冬を越えていっせいに活気づいてきたいのちと出会う体験をさせたいと思い“ねらい”をたてました。

「経験」 “動物や植物と出会い・いのちの存在を感じる”

土、水に触れたり、草花遊びを楽しんだり、ときには植物を味見したり、動物にであったりしながら幼児に春を感じさせます。



(植物) AおよびBエリアにおいては草花と触れ合い、春を五感で感じさせていきます。

- ・ 草花遊び (タンポポ、カラスノエンドウ、イタドリ、オオバコ、ナズナ、ヤエムグラ、レンゲ、ハルジオン、ウマノアシガタなどで、草笛、水車、風車、相撲、アクセサリー、花束作り、草木染めなど)
- ・ 植物を味わったり採取して食べたりする (タンポポ、スイバ、イタドリ、クサイチゴ、スギナ、ツクシ、ノカンゾウ、セリ、ササ、タケノコなど)
- ・ 植物を育てる (タンポポの綿毛飛ばしから種を発芽)

※ さらにいろいろな経験を考えていきましょう。

他の季節も同様に、その季節に適したフィールドを中心に経験する内容を計画しておきます。A、B、Cエリアのような麓一帯は、一見、近くて出かけやすいそうです。しかし、水辺が多くて生きものも豊富ですが、実は、夏から秋は危険も増します。そこで、夏はハチやヘビ、かぶれの危険が少なく、下草や藪が生い茂ることが少なく行動しやすい比較的涼しい杉や檜の植林さ



れた針葉樹林が中心のDエリアを使ったり、秋はバッタ類、アキアカネが多いEエリアや、ドングリ類などの実りが豊かな鎮守の森のあるFエリアに出かけたりするように計画します。

また、D、E、Fエリアへ向かう道すがら、春のA、B、Cエリアの自然の様子の変化に気づくように声をかけたり、そろそろ繁殖行動などを控えるCエリアで捕

獲して飼育してきた虫や動物をもとの自然に帰す機会も作るようにします。

## ② 春の活動

つぎに、上記の“① 春のねらいと経験”から実際に幼児と行っていく活動を作っていきます。ここではタンポポを例にあげて考えていきます。

### 「活動」 “タンポポ”

#### (ア) タンポポを活動に選んだ理由を明確にしましょう

「タンポポ」という活動を考えた理由は、タンポポはどこにでも見ることができ、数も多く、幼児に最も親しみやすい草花だからです。そのうえ、太陽に反応する様子、成長の様子がわかりやすく、草花遊びの種類も多いし、簡単に食べることができます。視覚(花の観察)、触覚(綿毛飛ばし)、聴覚(茎の草笛)、嗅覚、味覚(料理)とほぼ五感の全てを動員して、幼児が容易に春の自然と触れ合うのに適しているからです。



#### (イ) タンポポの教材研究をしましょう

タンポポの種類、その数や分布、都市化を教えてくれる指標生物であるということ、受粉など昆虫との関係、山菜としてのタンポポの知識と取り扱い方や料理法を調べ、教材研究を事前にしておくことにより幼児の活動に豊かにかかわることができます。



#### (ウ) 活動場所を決めましょう

Aエリアの休耕田のあぜ道沿いには春の草花が多く芽吹き、タンポポを起点に他の草花や昆虫にも興味を発展させて活動することができます。



#### (エ) 活動を展開しましょう

※詳細は「あいち環境学習ハンドブック（平成17年度版）」92ページ「タンポポ」を参照

- a 地面に座ったり手で土に触れたりして暖かくなったことを感じさせたり、太陽に向かって花を開いていることに気づかせましょう。顔を太陽に向かせて日差しの温かさを感じさせ、タンポポも同じように自然を感じているという一体感を幼児に持たせましょう。

- b 草花遊びで五感を使って遊びます。

- ・タンポポの茎の笛
- ・タンポポの茎とレンゲの花の風車
- ・タンポポの茎とレンゲの花のサングラス
- ・タンポポの茎の水車
- ・タンポポの腕時計
- ・タンポポの綿毛とばし
- ・タンポポの葉(着物)と花(顔)の人形など



c タンポポを料理して給食  
やお弁当に一品加えてみま  
しょう。

- ・タンポポの葉ーサラダ  
おひたし てんぷら
- ・タンポポの花ーてんぷら  
サラダ
- ・タンポポの根ーきんぴら  
コーヒー



#### 4 プログラムを実施するにあたっての留意事項

- (1) 野外に出かける活動は、常に危険があります。事前に必ず下見をして重大な事故を回避するように準備しておく必要があります。しかし危険を察知し、回避する力も身につけさせたいものです。些細なことまで禁止するのは能がありません。時には、危険や恐れを経験することで、幼児は自然の奥行きや畏敬の念を覚える貴重な感性を学習していくものです。
- (2) 幼児の自ら育とうとする力を大切にしましょう。“危ない”、“汚い”、“やめなさい”、“はやくしなさい”という大人の固定観念にとらわれた言葉はなるべくつつしんで、幼児の発見を待ち、繰り返すことを認め、興味や関心を受け止め、共感するように心がけたいものです。
- (3) 実際に幼児と活動してみて、幼児たちが興味を抱いたこと、発見したことを次の年度に生かしていくために、必ず活動ごとの記録をとっておくようにしましょう。
- (4) 幼児の活動の様子を“園だより”などで保護者にフィードバックし、家族ぐるみの環境学習にしていきましょう。
- (5) 園外のフィールドで活動するに当たっては、地域や土地の持ち主、管理者を確認し、事前に具体的な活動内容を伝えるように心がけ、環境学習への理解を得るようにしておきましょう。

